

でき あい 新愛 プラネット! ③

ライバルグループに
しょうたい
正体がバレちゃった!?

あいら / 著
こぼと
小鳩ぐみ / イラスト



黒月士和

中一。PLANETのリーダーで星のクラスメイト。メインボーカル。



日向星

中一。ソングライター兼PLANETのプロデューサー。明るくて太陽

みたいな女の子。



緋宮金色

中二。PLANETのラップ担当。演技もうまい。



赤羽大虎

中二。低音とダンスが得意。PLANETの新曲で



若槻木央

中一。PLANETのラップ担当。ゲームの実況を配信してこる。



青海水牙

中一。高音が得意。自信家でツンデレ。



陸斗

大人気アイドルグループアロハエのメンバーで王子様キャラ。スエラの大ファン。



空音

EARTHのメンバーで事務所の社長の息子。なんでもできる優等生キャラ。



海里

EARTHのメンバーで、面倒見のいいお兄さんキャラ。



世河

大手芸能事務所WORLDのプロデューサー。

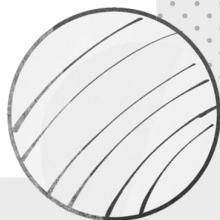
冷泉エリス

中一の幼なじみ。性格も見た目もイケメンな女の子。



もくじ

- 004 アース リくと EARTH、陸斗
- 016 しんぱい かくご 心配と覚悟
- 024 あめ なか 雨の中
- 034 サイド リくと くらやみ て ほし [side 陸斗] 暗闇を照らす星
- 057 おうじゃ あらわ 王者、現る。
- 071 アース EARTH のリーダー
- 079 うら おもて 裏？ 表？
- 090 かな かこ 悲しい過去
- 102 サイド かいり や あ こうかい [side 海里] 八つ当たりと後悔
- 111 さいかい 再会
- 123 サイド かいり ほじ かんじょう [side 海里] 初めての感情
- 134 きゅうてん かい 急展開？
- 141 サイド と や せんせん 小こく [side 土和] 宣戦布告！
- 150 しょうり て 勝利をこの手に！
- 165 けっせん 決戦
- 177 さいこう 最高のステージ
- 181 みち トップアイドルへの道！





EARTH、陸斗

放課後の部室にいた、変装をしたその人。

「……ステラさん……」

変装を解いた彼はまるで、ヒーローを見る無邪気な子供みたいな目で私を見た。

「あ、あの、人ちがいたと……」

「俺がステラさんの声を、まちがえるはずないっ……!」

その透き通るようにきれいなハスキーボイスを聞いて、私は彼が……今をときめくアイドルグループ「EARTH」のメンバー、陸斗さんと気づいた。

「やっと会えたっ……!」

私を見つめて、幸せそうに微笑んだ陸斗さん。

やっと……?」

というか……どうして大人気アイドルが、こんなところにいるのっ……。

目をきらきらさせながら、私を見ている陸斗さんに、困惑してしまっ。

「おい、いい加減にしろ陸斗……!」

暴走気味の陸斗さんに、水牙くんが声を荒らげた。

「気安く俺の名前を呼ぶな!」

引き下がるところか、水牙くん以上に大きな声で抵抗した陸斗さん。

何かなんだかまったくわからなくて、みんなの方を見る。

「あ、あの、この状況は……!」

どうして陸斗さんがここにいるのかも、私のことがわかったのかも、全部わからない。

火虎くんが、取り乱した様子で頭を抱えた。

「陸斗がステラさんを探すために、変装して俺たちの学校に乗りこんできたんだ」

——え??

ステラを探しに……。

「同じ事務所だったし、学校はバレてるからね……!」

「まさか、こんな強硬手段に出るとはな……!」

ぼそっと、金色くんと土和くんがつぶやいた。

どうして、私を……。

あ……。

『じつは、EARTHのメンバーにステラさんの大ファンがいますー！』

『ステラさんの曲がとにかくいいんだとずっと言っていていますー！』

もしかして……世河さんが言っていたのって、陸斗さんのことだったのかな……？

そう考えれば、陸斗さんの行動にも説明がつく。

だけど……PLANETのみんななら、私のことを知ってると思って、わざわざ学校にまで来

たつて……。

普通……そ、そこまでするかな……？

不思議に思っ陸斗さんを見ると、さっきと同じきらきらした目でこっちを見ていた。

「あ、あの、急にきてごめんなさい……でも俺、ステラさんに直接お願いしたくて……」

本当に、私を探すために来たのかな……？

「この子は俺のクラスメイトで、ステラさんじゃない」

すっと、私の前に立った土和くん。

「だったら、どうして事務所なんて言ったんだよ。PLANETだって知ってるってことだろ？」

「……」

「他のやつらはともかく……金色のプロ意識の高さだけは俺も認めてる。おまえが無関係なやつに、芸能活動のことを明かすわけない」

陸斗さんはもう私がステラだと断定しているのか、確信のある言い方だった。

「雑用を手伝ってもらってるだけだ。この子はステラさんじゃない」

土和くんも嘘を吐き通してくれるつもりなのか、動揺を見せずにじっと陸斗さんを見ていた。

「だから……俺がステラさんの声をまちがえるはずないって言ってるだろ」

「出ていけ」

「ステラさんと話をしたら出ていく。あ、あの、俺の話を……」

「警察に通報するぞ」

「……っ」

警察という単語を出されて、陸斗さんの表情が歪む。

「おまえは今、立派な不法侵入者だ」

「……」

たしかに……警察に通報したら、陸斗さんはこの生徒ではないから、大事になるかもしれ

ない。

大人気アイドルが警察沙汰なんて、大問題だ。

きっと、ここまで言わないと陸斗さんが引き下がらないって、わかった上での発言だと思
う。

「ほら、帰れ」

「ステラさん……！ 俺の話を聞いてください……！」

「この人はステラさんじゃないって何回も言ってるだろ」

「ステラさん……!!」

完全に暴走状態の陸斗さんの腕を、土和くと水牙くんが押さえた。

そのまま、ふたりに連れていかれる陸斗さん。

「今度忍びこんだら、本当に通報するからな。人気アイドルが学校に不法侵入なんて、いいネ
々になるぜ」

「……っ」

ふたりに引っ張られて部屋から出ていく陸斗さんの表情が、一瞬泣きそうに見えた。
必死に助けを求めるような瞳に、胸が痛んだ。

せっかくなこここまで来てくれたんだから、少しくらい……話を聞いてあげるべきだったかもしれない……。

こんな強硬突破に出たってことは、楽曲提供を断ったこと、納得していないんだろっし……直接説明して、お断りしたほうがよかったかな……。

「星ちゃん、大丈夫？」

「あ……う、うん」

「びっくりさせてごめんね。まさか陸斗が来るなんて……」

気づかってくれた金色くんも動揺しているのか、ふう……と息を吐いている。

たしか、前PLANETのみんなとEARTHのみんなは仲がよくないって聞いていたし……みんなも陸斗さんが学校まで押しかけてくることは予想外だったのかな……。

「ちっ……あいつやばいだろ」

「……」

扉が開いて、水牙くんと土和くんが戻ってきた。

「ふたりとも、おかえり。陸斗は？」

「裏門のところまで引きずって、置いてきた」

「さすがに正門は人目があるし……バレたらまずいと思って」
たしかに、下校ラッシュは過ぎたとはいえ、正門は生徒も通るし……陸斗さんがいるってわ
かったら騒ぎになることはまちがいない。

「もう来るなって釘は刺しておいたけど……あいつは他人の言うことを聞かないやつだからな
……」

「……あんな必死な陸斗、初めて見た……」

ずっと黙っていた木央くんが、ぼそっとつぶやいた。

他のみんなも、困ったように視線を下げている。

そうなんだ……。

「ちゃんと私から、言ったほうがよかったかな……」

追い返すような形になってしまったけど……わざわざ来てくれたってことは、本当に私の曲
を好いてくれているんだと思うし……ファンの人を無下にしてしまった罪悪感があった。

せめて、本人に納得してもらえるように、断るべきだったと思う……。

「星が責任を感じる必要はないよ」

「そうそう、あんなやはいやつに付き合わなくていいっつーの!」

「うん、関わらないほうがいい」

土和くんと水牙くんと火虎くんが、気づかうようにそう言ってくれる。

「多分、こんな行動に出るってことは……こっちの意見なんて聞く気がないんだと思う。断られても気にせず、頼みこむつもりだったみたいだし……」

「金色の、言う通り……」

断っても、無駄ってことだよね……。

「星が折れるまで頼み続けるつもりだろうし、相手をしてたらキリがない。話を聞く姿勢を見せたらつけこまれるだろうし、ああいうのは無視するべきだ」

みんなの意見も理解できたから、私は静かにならずいた。

「そうだよね……世河さん伝いに、はっきりと断っているし、陸斗さんもそれは知っているはず……。」

「その……EARTHに曲を書くつもりがないなら、なんだけど……」
えっ。

「そうだね……決めるのは星ちゃんだから……」

「……まあ、俺たちが断ってくれていうのも違うしな……」

もしかして……私がEARTHに楽曲提供する可能性があるって思ってるのかな？

そういえば、みんなにはちゃんと話していなかったかもしれない。

改めて、伝えておこう。

「私はみんなのプロデューサーになるって決めたし、世河さんにも、WORLDとは仕事をしませんって言ったから。何があってもWORLD所属のグループと仕事をするとはなごら」
プロデュースしながら他のアイドルにも楽曲提供をするのは難しごと、PLANETに集中するっていうケジメでもあるから。

私の言葉に、水牙くんがばああっと顔を明るくした。

「やったぜ！」

「ちょっと水牙、喜びすぎた」

「……俺も、うれし」

「はは、俺もー」

「正直僕もうれしい。僕たちを選んでくれてありがとう、星ちゃん」

みんなと一緒に夢を追いかけさせてもらえて……感謝するのは私のほうなのに……。

「いちいちそ……」

私が微笑むと、みんなも笑顔を返してくれた。

陸斗さんのことは気がかりだけど……PLANETのプロデューサーとして、これからも頑張ろっ……！

「それじゃあ、今日の活動をはじめよう」

「あ、そうだ、新曲のメロディ案を持ってきたの……！」

「え、もうっ……っ？」

席に座ろっとしていた金色くんが、勢いよく振り返った。

「き、聴きたいー！」

「聴かせてくれー！」

「……お、俺も……」

早く早くと急かす様子が小さい子供みたいで、なんだかみんながかわいく見えた。

「それじゃあ、流すね」

スマホを取り出して、ファイルを再生する。

「うわ……めっちゃ、いい……」

イントロから、うっとりした表情になった土和くん。

今回はダンスをメインにするって聞いたから、明るくて高低差の激しいメロディにした。

「かっけー！」

曲が終わると、興奮気味に叫んだ水牙くん。

「うん、体が動くというか、踊りたくなる曲だ……」

「この曲に乗って踊ったら、すごく楽しいだろうね」

「……わくわくする」

「見る人も踊りたくなるような、そんな振りつけを考えたね……」

早速イメージが湧いたのが、火虎くんがうずうずしているのがわかった。

「まだイメージ案だったんだけど……みんながいいなら、これをベースに、全体のメロディを作ろうと思ってる。その後歌詞もつけてっていう順番で作ろうと思ってるんだけど……できるだけ早く完成させられるように頑張るね」

新生アイドルとして話題になって今だからこそ……早く次の曲を出したい。

PLANET ちびんな曲でも歌えて踊れるってことを、たくさんの人にわかってもらいたいかな。

「星、あじがやい」



うれしそつな土和くとみんなを見て、一層やる気が湧いてきた。
プロデューサーとしてもだけど……ソングライターとしても頑張るぞ……！



心配と覚悟

その後、歌詞の案もみんなまで話し合って、新曲のイメージを固めた。

「そろそろ下校時刻になるし、帰ろうか」

金色くんの声を合図に、みんな帰る支度をする。

部室を出て、靴を履き替えて外に出た時だった。

あれ……？

正門に人影があることに気づいて、じっとその人を見る。

変装をしているのか、帽子とマスクとメガネをしているその人は、きよろきよろと周りを見ていた。

見覚えがあるその姿に、おどろいて目を見開く。

「あそこにいるのって……」

もしかして……。

「……マジかよ」

水牙くんも気づいたのか、正門に立っている人……陸斗さんの姿を見て、顔を青くしている。

「星、こっち」

土和くんに手を引かれて、裏門に移動した。

「まさか、待ち伏せしてるなんてね……」

「あいつ……ストーリーカーかよ……」

金色くんと水牙くんが、呆れたようにため息を吐いた。

「ステラさんへの執着、すごいね……」

「そこまでして、ステラさんに曲を作ってもらいたいってこと……?」

火虎くんと木央くんも、心配そうにこっちを見ている。

世河さんが言ったの、本当だったんだ……。

「警察はさすがにたけど、事務所に連絡したほうがいいかな……?」

「ていうか、あんなあやしい格好で正門に立ったら、通報されかねないぞ」

さっき会ってから、二時間くらい経ってるのに……ずっと待っていてくれたのかな……。

そう思うと、やっぱり罪悪感……。

「今日だけならいいけど……」

「……やめろよ土和、伏線はるの」

「さすがにまた来たりはしないはず……」

「だからやめろって……」

私も……そこまではしないとと思う。

きっと今日であきらめてくれると信じたい……。

そう、思ったけど……。

「……」

り、陸斗さん、今日もいる……。

あれから数日。いない日もあるけど、少なくとも二日に一度は学校に来るようになった陸斗さん。

いつも放課後のチャイムが鳴る前くらいから正門の前に立っていて、私たちが部室から出る時間になっても待っている。

今日も正門の前にある姿を見て、さすがにあせりがこみ上げてきた。

陸斗さんは今一番人気と言っても過言ではない国民的アイドルで、休みもないはずだっ
んな言っていたのに……そんな人が、私に曲を書いてもらいたい一心で、仕事を抜け出してこ
こまで来てくれているんだと思うと……すごく申しわけない気分だった。

「そのうちあきらめてくれたらいいけど……」

「そうだね……あいつがあきらめるまで、刺激せずに放っておこう」

「星、あいつは無視だ！ 見なかったことにしろ！」

「近づかないほうが、いい……」

みんなが心配してくれているのがわかるけど、このまま見て見ぬふりをするべきなのかな
……。

「星も、気をつけてね。陸斗がいたら裏門から帰るようにして」

「うん……」

土和くんの忠告にうなずいたけど、心の中の罪悪感はふくらむばかりだった。

『……ステラさん……』

きらきらした目で私を見てくれた陸斗さんの表情が、脳裏にちらついていた。

次の日の朝。

「みんな、おはよう」

「星、おはよう〜！」

いつものように教室に入ると、友だちが集まってきてくれて、楽しく話をする。

「ねえ、最近正門に変な人いるよね？」

ぎくっと、体がこわばった。

「誰かの知り合い……?」

「変な格好してるし、怖いよね……」

やっぱり……みんな不審に思ってるっ……。

「っていうか、先生たちはなんで通報しないの？ あんな不審者みたいな人がいるのに」

「それがさ、先生たちに言ったら『この学校の生徒と約束してる人だから大丈夫だ』って

……」

えっ……ま、まさか陸斗さん……先生たちに説明済み……!?

ど、どごまで手を回してるんだろっ……。

「何それ……誰と約束してるんだろっね」

や、約束やくそくしてるっていうのは、違ちがう気きが……。

「それより、昨日きのうのEARTH見みた？」

またしても、ぎくつと体からだが固かたくなる。

「生放送なまほうそうのやつだよな？」

「海里かいり、かっこよかった〜！」

「空音くおんも推おしじゃないけど、ビジュアルはめっちゃくちやいらいよね！」

正門せいもんの不審者ふしんしゃの話はなしから、話題わだいがEARTHアースに変わかった。

みんな楽たのしそうに、EARTHアースの話はなしで盛り上あがっている。

「ただ……陸斗りくとがなんか……」

陸斗りくとさん……？

「うん、わかる……最近さいきん元気げんきないよね？」

え……？

「どうしちゃったんだろう……なんか笑顔えがが減へったっていうか……」

ファンの人ひとが見みてもわかるくらい、元気げんきがないなんて……。